

## 首里城外壁の弁柄色 Indian red wall of SYURI castle

川崎 眞俊 Masatoshi Kawasaki

株式会社川崎塗料  
Kawasaki Paint Co., Ltd.

キーワード：首里城、弁柄色

Keywords : SYURI castle, Indian Red

### 1. はじめに

首里城は十四世紀末に創建された中国や日本の文化も混合する琉球独特の城。幾多かの焼失や再建、重修を繰り返しながら、沖縄戦で焼失したが、1992年11月3日に復元されて今の姿になった。私はその様な首里城の外壁の弁柄色について仕事上塗料を扱う（販売）立場と地理的・歴史的繋がり強い薩摩の末裔の立場から考察を試みたいと思う。

### 2. 再建経過概要

#### 2-1. 交流地の事前調査

首里城正殿実施設計委員メンバーは国外では中国・韓国の建造物の調査を行ったが、国内では京都の三カ寺の他鹿児島県の五つの神社の事例調査を行った。

鹿児島県の神社本殿の外壁色

霧島神宮	朱赤
鹿児島神宮	弁柄色
新田神社	朱赤
枚聞神社	朱赤
蒲生八幡神社	朱赤

#### 2-2. 赤か黒か

正殿の設計において最も難解だったのが外壁の色だった。彩色の根拠が殆ど無く、昭和の修理の折は古びた状況に合わせるため取り替えた木材を墨などで古色塗りしたほどであり、当初「赤みがかった黒」と結論づけられた。

#### 2-3. 古老への聞き取り調査

偶然現れた古老から糸口を掴み、古老のリストアップをはかり、入念なヒヤリングを行った

結果、昭和の修理工事に直接携わった人が現れ、現場で彩色顔料の調合をやっていたことも分かった。その人からは弁柄が残存する古材を見本に使ったとの証言も得られた。

### 2-4. 外壁色の色調の推定

そもそも塗装の有無すら論じられた外壁色であったが、以下の観点から彩色を施すことになった。

- ①同じ建物で彩色を施す箇所と施さない箇所が存在した場合、全体として工事中の建物のような違和感が生じてしまうこと。
- ②沖縄の日射と風雨の下では、木材に何も彩色を施さないと材の傷みがはやくなってしまうこと。
- ③中国を始めとした諸外国の事例からも宮殿建築の外壁は塗られていたと考えるのが自然であること。
- ④文献には、内壁には赤い彩色が残っていたとの記述があるため、内壁は塗られていた可能性があり、そうした場合、外壁についても塗られていたと判断するのが妥当であると考えられる。

以上の観点と「懸社沖縄神社拝殿構造様式説明書」や「沖縄神社拝殿修理工事関係資料」などの文献に内壁板に弁柄色が残っていたとの記述から内壁については弁柄色と推定できる。なお、外部と内部の柱はともに前述の証言などから弁柄色と結論づけていたが、柱と壁の色の調和の観点からして、内部の柱と壁が同じ色ならば、外部の柱と壁も同じ色でなければ建具の色との調和がとれなくなってしまう。建具は表と裏は同じ色である筈だからである。このため、外壁についても弁柄色を採用することになった。

### 3 使用材料

琉球では漆器等の工芸品はもとより建築彩

色に至るまで、中国から大きい影響を受けていたため、その原材料も中国、特に福州産の物が使われていた。

### 3-1. 弁柄

酸化第二鉄を成分とする酸化鉄系赤色顔料でかつてインドのベンガル地方産を輸入したため「べんがら」と名付けられた。天然に産するものも存在するが、現在は合成されたものが多く使われている。化学的には鉄の赤錆と成分的に同じで、それだけ安定性が高い訳である。顔料としては着色力・隠ぺい力が大きく、耐熱性・耐水性・耐酸性・耐アルカリ性のいずれにも優れており、安価な上無毒で人体にも安全なため非常に用途は多い。

### 3-2 桐油

アブラギリ（油桐）の種子から採取される桐油は不飽和脂肪酸を多く含む乾性油で古来から塗料や油紙の材料として盛んに使われて来た。湿気や雨を防ぐ効果にすぐれている。紙に塗ったり合羽や包紙にも使われるが、中国では昔から彩色材料に混ぜて使っていた。桐油彩色は正殿の主要箇所にはほとんど使われている。

## 4. 現代の塗料との関連

先に述べたように顔料としての弁柄は天然から合成への変遷はあるものの、その多くの特性から現在でも広く塗料原料として使われているが、塗料を形成するもう一つの要素である展色料（vehicle）は化学の発達と共に大きな変化と進化を遂げ、天然油脂に始まりナフサを原料とする種々な樹脂の進化を経て、現在はフッ素樹脂やシリコン樹脂などの高耐候性を持つものが主流になって来ている。

## 5. 薩摩との関連

1609年春薩摩の琉球侵攻に始まる琉球支配が1872年の明治政府による暫定的琉球藩設置まで続いたが、孟宗竹や甘藷の渡来など中国を中心とする大陸からの物産や文化を琉球経由で薩摩側が享受する方が多かった。魔除けの石敢當等現在でも当地で新設されるものもある。旧島津別邸の仙巖園には琉球王から贈られたと言う望嶽楼なる建造物も現存している。

## 6. おわりに

北京の紫禁城、ソウルの景福宮などと同じく弁柄色の外壁を持つ首里城は正しく大陸の影響を受けており、本土の社寺の大半に見られる朱赤外壁と明らかに異質なものを感じさせる。弁柄色は那覇市内随所で目にする彩色である。ここにも大陸と日本との両面外交を続けながらも、どちらかと言うと前者の影響を色濃く受けていた琉球王国の成り立ちと歴史が窺える。今でも弁柄色の似合う南の海邦、沖縄である。



図1. 首里城正殿と御庭から見た奉神門

## 参考文献

- [1] 「首里城の復元」 首里城公園友の会  
財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団
- [2] 「博物館展示ガイド」 沖縄県立博物館・美術館
- [3] 「首里城公園」  
財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団  
首里城公園管理センター
- [4] 「塗料と塗装」 児玉正雄 坂東依彦 児島修二  
太陽閣